高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol.53

▲「鎌倉文庫」の人々の新年会　鎌倉・里見邸にて
左から真船豊、大仏次郎、里見弴、久保田万太郎、川端康成、中山義秀（日本近代文学館提供）

リレー随筆

父、横山隆一とかまくら――

横山　隆雄（よこやま　たかお）

亡くなる少し前まで五年間にわたって高知新聞に連載された父の身辺雑記的エッセイはタイトルが『鎌倉通信』でしたから、鎌倉といえば横山隆一というイメージをお持ちの方も沢山おられるのではないでしょうか。

今でこそ住民の大多数が東京に通うサラリーマンのベッドタウンと化していますが、都心から電車で1時間足らずなのに、きわめて閑静で歴史的遺産に囲まれたこの古都に魅せられ居住していた文人は数多く、七、八十年も前から「かまくら文士」の名称で知られておりました。

父が東京から移り住んだのは昭和12年ですが、久米正雄、里見弴、川端康成、小林秀雄といった巨匠たちと朝日新聞に連載を描きはじめたばかりの新進漫画家との間にお付き合いなどあるはずもなく、また、文化的香りにあこがれて鎌倉住まいを決めた訳でもなかったのです。理由を聞くとがっかりなさるでしょうが、なにかの取材で気象台に行ったとき「関東落雷図」というのを見たら、落雷場所を示す赤いガラス玉で一面覆われている中、一か所だけ空白部分があり、そこが鎌倉だと聞いたので大のカミナリ嫌いだった父は即座に転居を決意した、というのです。よわむしの父らしい話です。

文士というと書斎に閉じこもり、書き損じの原稿用紙に埋もれて苦悩の表情を見せる姿を連想しがちですが、湘南という風土を好まれた鎌倉の文士さん方はとても明るく、健康的なところがあって、大勢集まってお祭り騒ぎするのが大好きだったようです。

そういう雰囲気は高知生まれの父にとって最も得意とするところ、すぐに溶け込み「フクちゃん、フクちゃん」と可愛がられるようになりました。

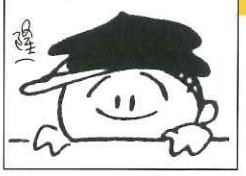
お祭り騒ぎ、といえば夏の風物詩「鎌倉カーニバル」があります。昭和9年に久米正雄さんの音頭で始まった行事で、終戦直後には父の率いる漫画集団が活躍しました。後になって大手企業が参加する市の観光事業に発展しましたが、逆に手作りの良さが失われすたれてしまいました。

皆さんの中ではかなり年若で、また長生きもした父は数多くの鎌倉文士を見送ってから、この地で生涯を終えました。

（横山隆一長男）

展覧会紹介 Exhibition

横山隆一と鎌倉文士と高知展への誘い



平成23年
4月16日(土)
▼
6月19日(日)
企画展示室
観覧料400円

▲ 貸本屋「鎌倉文庫」清水昆画

高知市出身で「フクちゃん」の作者として知られる横山隆一は、高知城東中学校(現・高知追手前高校)を卒業後、上京し、23歳で新漫画派集団(現・漫画集団)を結成。その後、新進漫画家としての地歩を固め、28歳のとき、東京から鎌倉に転居しています。1937(昭和12)年のことでした。

当時の鎌倉は、首都圏のベッドタウンとして社会的にも文化的にも発展し、錚々たる文学者や知識人、芸術家達が居を構えていました。

個性豊かな人間性や才能をもつ隆一は、これらの人々に歓迎され、彼らと交友するようになります。このことは、隆一に大きな影響を与え、さらなる飛躍へと結びついて行きました。

中でも、久米正雄、里見弴、大佛次郎といった、鎌倉在住の作家などによって結成された「鎌倉ペンクラブ」への参加を通して、鎌倉を舞台に、文学に携わる人たちとの交流は深まっていきました。

また、本の流通が乏しい終戦直前には、川端康成と久米正雄の発案で、鶴岡八幡宮近くに貸本屋「鎌倉文庫」を開店しました。この取り組みは、川端康成が「悲惨な敗戦時に唯一開かれていた美しい心の窓であった」と称したように、殺伐とした貧困の時代、人々の心に希望の灯をともしました。

そして、1934(昭和9)年に久米正雄の提唱で始まった「鎌倉カーニバル」との関わりがありました。戦時中、中断していたこの催しの復活に際し、1948(昭和23)年、久米正雄に頼まれた隆一は、漫画集団をさそって「鎌倉カーニバル」に参加しています。

この他にも、文壇史に残る鎌倉文士と隆一との交流や、人間味溢れる文士たちの素顔が、隆一のエッセイや講演会などを通じて紹介されています。

▲ 鎌倉カーニバルでは海の女王ミスカーニバルのコンクールなど多彩な企画が…。

今回の展覧会では、隆一と鎌倉文士の交流を示す記念の品々を展示するとともに、隆一の眼から見た文学者達の素顔などもご紹介します。また、高知ゆかりの作家などの紹介も交えながら、横山隆一や文学を介して、鎌倉と高知の関係なども紹介できればと考えています。

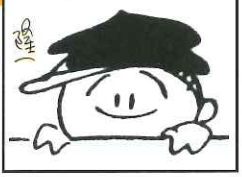
展示構成

プロローグ

横山隆一と文士たちの交流の舞台となった鎌倉の魅力を、写真パネルや鶴岡八幡宮のぼんぼり祭りの様子などを通して紹介します。

展覧会紹介 Exhibition

横山隆一と鎌倉文士と高知展への誘い



平成23年
4月16日(土)
▼
6月19日(日)
企画展示室
観覧料400円

Ⅰ 横山隆一と鎌倉文士たちとの出会いとその時代

横山隆一と鎌倉文士たちとの出会いや、隆一が鎌倉文士たちと関わったその時代を象徴する3つの出来事を通してご紹介します。

（1）鎌倉カーニバル
（2）鎌倉ペンクラブ
（3）貸本屋「鎌倉文庫」

Ⅱ 横山隆一と親交の深かった鎌倉文士たち

鎌倉文士の中から特に親交の深かった、6人の作家(里見弴、久米正雄、大佛次郎、川端康成、永井龍男、小林秀雄)を中心に、彼らの素顔や人間的な魅力を、ゆかりの品などを通してご紹介します。

▶川端康成書「美しい日本」鎌倉文学館蔵

Ⅲ 鎌倉ゆかりの文士と高知

鎌倉文士の中には、高知を舞台にした作品を書いたり、高知と深い関わりを持った文士がいます。「天誅組」「堺港攘夷始末」を書いた大岡昇平。不良華族事件・家の没落という苦境の中、高知の知人を訪ね、渓鬼荘という庵を建てて移り住み、再び中央に返り咲いた吉井勇。二度、高知を訪ね高知の俳句界に大きな影響を与えた高浜虚子。こうした文士と高知との関わりを辿ります。

Ⅳ 横山隆一と高知

横山隆一は、高知ゆかりの作家の作品の挿絵も手がけています。中学校時代の先輩、田岡典夫の新聞小説「絵暦」や井伏鱒二の「へんろう宿」は、彼の挿絵とともに紹介されました。ここでは、高知ゆかりの文学者との交流を中心に紹介します。

また、高知の街には「横山隆一記念まんが館」、はりまや橋の「純信・お馬」の像やフクちゃん桜(牧野植物園、高知追手前高校ほか)など、随所にその足跡は残されています。

文学散歩などを通して、今に生きる横山隆一を顕彰します。（学芸課／津田加須子）

◆関連企画のご案内◆

■対談「横山隆一と鎌倉文士」

鎌倉文学館 館長 山内静夫氏、横山隆一氏の次男 横山隆二氏による対談です。

日　時：平成23年5月1日(日)　午後2時～3時30分
場　所：高知県立文学館1Fホール　　定　員：100名
参　加：要当日観覧券　　申　込：電話または文学館受付にて事前申込

■鼎談「横山隆一さんの魅力を語る」

鎌倉文学館 学芸課長 小田島一弘氏、横山隆一記念まんが館 学芸員 奥田奈々美氏と高知県立文学館 学芸課長 津田加須子が、横山隆一さんの魅力を語ります。

日　時：平成23年5月29日(日)　午前10時～11時30分(予定)
場　所：高知県立文学館1Fホール　　定　員：100名
参　加：要当日観覧券　　申　込：電話または文学館受付にて事前申込

■クイズ 横山隆一と鎌倉文士と高知

日　時：平成23年5月3日(火)・4日(水)・5日(木)
場　所：高知県立文学館 企画展示室　　定　員：先着100名
参　加：要当日観覧券　　申　込：当日 会場で受付

■徒歩で行く「横山隆一記念まんが館と文学の旅」

横山隆一記念まんが館、はりまや橋、フクちゃん桜など、高知市内の横山隆一さんゆかりの地を訪ねます。

日　時：平成23年4月17日(日)・6月2日(木)

その他、朗読の会などを催します。詳細は文学館までお問い合わせください。

☆展示解説

展覧会担当者による展示解説を行います。

会期中の毎週土曜日と、毎週日曜日

各日とも午後1時半～(約30分)
参加には当日観覧券が必要です。
直接会場にお越しください。

◆「収蔵資料展 高知・再考」を振り返って

高知県立文学館の収蔵品を中心にご紹介した「収蔵資料展　高知・再考」。寺田寅彦や井伏鱒二など著名な作家の初公開資料や、あまりご紹介の機会のなかった人々を取り上げ、多くのお客様にご好評いただきました。中には、色鮮やかに土佐の風俗が描かれた『土佐国職人絵歌合』を見に何度も来館されるお客様もいらしゃいました。

関連イベントもバラエティ豊かに開催！ 土佐民話の第一人者である市原麟一郎さんが演じる紙芝居と落語を上演した際は、小さなお子様からご年輩の方々まで、幅広い年代の方にお楽しみいただきました。

また、高知が誇る教育者・小砂丘忠義についての講演「小砂丘忠義の人間論・教育論」では、文教大学教授・太郎良 信先生にお話いただきました。小砂丘資料が高知に戻ってきた経緯や、新資料の発見の話などを織り交ぜた刺激的な内容で、当日は、学校の先生方や小砂丘賞委員会の方々など教育に携わる方々も来館し、熱心にお話を聴いておられました。（学芸課／永橋禎子）

▲記念講演会の様子

◆新しい常設展に、賞賛の声！

展示内容が新しく入れ替わった常設展。「変化する常設展」という全国的にも珍しい展示方法に、賞賛の声をいただいております。

目玉である企画コーナーでは、「田宮虎彦生誕百年展」として、〝芥川賞を超えた作家〟田宮虎彦の愛用品や自筆原稿等を展示。根強いファンの多い作家であり、立ち止まってじっくりご覧になるお客様を多く見かけます。また、常設展で新しくご紹介している作家には、生没年などがメモリアル・イヤーとなる今村楽、中江兆民、幸徳秋水、馬場孤蝶、タカクラ・テル、若尾瀾水などがいます。特に、没後200年の近世文人・今村楽は文学館で初紹介となります。楽の辞世の句が書かれた掛軸は必見。また、不撓不屈の作家タカクラ・テルの書簡なども展示中です。貴重な資料をぜひご覧下さい。

ちなみに、今年度の文学カレッジでは、常設展で紹介している作家に関する講義を行います。

こちらもぜひ、ご参加ください！　（学芸課／永橋禎子）

▲新しい展示を、ぜひご覧ください。

館長室から

「春は花…」

元吉　喜志男

高知県立文学館の平成二十三年度の企画展は、「横山隆一と鎌倉文士と高知展」で幕を開けます。本県出身で人生の大半を鎌倉を舞台に過ごされた横山さんは、久米正雄、大佛次郎、里見弴ら鎌倉在住の作家などによって結成された鎌倉ペンクラブに所属し、鎌倉文士と呼ばれる錚々たる多くの文学者達との人間的な深い交流がありました。その中の一人に日本人として初のノーベル文学賞を受賞された川端康成さんがいます。ストックホルムでの授賞式で日本人の精神伝統の根本に自然との合一があることを説いた「美しい日本の私」と題した川端さんの講演があります。その冒頭で、日本の四季の移り変わりを愛で、四季それぞれの美しさを詠んだ道元禅師の歌を取り上げています。「春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえて　すずしかりけり」すぐれた禅の悟りの公案歌であるともいわれているこの歌などを紹介し、日本の古典文学の中に流れている自然意識、日本文化論、そして文学者としての自身にもその精神伝統が受け継がれていることを世界に向けて格調高く発信されました。

さて、昨年二月から約一年間「土佐・龍馬であい博」の関係で、文学館の企画展示室は土佐山内家宝物資料館・特別会場としてお貸ししていました。博覧会が終了し、この二月からは常設展＋企画展という従来の文学館の形態となっています。その際、常設展示室の空間をこれまでのお客様の意見も反映して、ささやかな四季の風情なども感じていただければと、季節にあわせ高知の春夏秋冬の風景で飾る大きなタペストリーを配しました。何枚もの候補から選んだ図柄が、奇しくも春の桜、秋の月、冬の雪とこの道元禅師の歌と一致しており、前述の川端さんの記念講演と重なって思い起こした次第です。

土佐文学さんぽ 52

風土を刻んだ随筆 ― 川村源七「教育へんろ」など ―

猪野 睦

川村源七といえば名物高知県立図書館長だった。退職後は高知市民図書館につどう文化常連のひとりだった。いつも田舎で使う土佐弁でおっとりユーモラスに語り、酒も愛した。さまざまのアイデアをだし、またエッセイ、随筆、講演の名手だった。軽妙な随筆を〆切りまでにさっと書くというのも評判だった。

「六十五点の人生」「教育へんろ」「椀と盃」「寺田寅彦と土佐」などの本をもち、戦前、戦中、そして戦後の暮しに眼をすえて、警句も発信した人だった。

大阪へでて弁護士の書生をしながら夜学の商業学校をでた。小説を乱読した。そして高知へ帰り代用教員をふりだしに椿原、本山などで教員生活を続け、戦時下、高知県立図書館の司書となり、戦後、図書館長になった。高知空襲で丸焼けになった県立図書館の再建を図り、全国に先がけて自動車文庫をつくり、県下に読書運動をひろげた開拓者だった。

こういう人の書いたものは、その時代の匂い、人情、暮しぶりを浮かびあがらせるものであり、貴重な昭和史、広い意味での文学散歩、民俗散歩になっている。

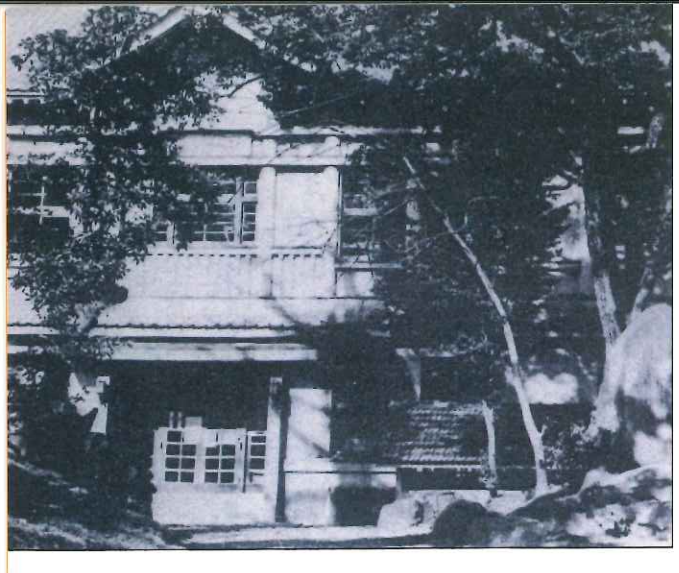
「教育へんろ」は高知新聞に連載され、高知市民図書館のしみんしりーずの新書となった。教員生活はエゴ廻りだった。エゴとは四国山脈の奥地に深く入りこんだ谷間のことであり、戦前バスのない奥地の小学校への赴任のことだった。つまり僻地への飛ばされ組のことを稱した。川村源七も当時、難路の辞職峠といわれた布施ノ坂をこえ椿原につき、そこから家族をつれて奥の越知面（おちょうめん）に赴任した。

敗戦後は高知市にいたが、空襲焼跡をほり返し、キビ、イモ、野菜、空いた土地にはなんでも作った。戦後皆がたどった姿だった。こうした日々を、家では病弱の夫人の世話をしていく日常とともに淡々と書いた。いまでは忘れられた時代光景である。

いつも土佐方言を随筆のなかにふんだんにとり込んだ。寺田寅彦とはまた一味違った土地に根ざした暮しのなかの名随筆だった。いま読み返しながら、地域で地元のことを、時代のことを書きついだ目立たない随筆が、ほかの人にも多いのに思いあたった。

それらの多くは小冊子であり、半世紀の時間の経過とともになくなっていくが、はっとする描出もある。かつては古書店に郷土ものとしてよくでていたが、古書店もへり、いまではほとんど手にすることができない。

（詩人）



◀戦後再建した高知県立図書館（高知県立図書館所蔵「高知県立図書館開館一〇〇年の歩み」より）

資料受贈報告

―最近の寄贈資料から―

『歌集 長江―三国志の旅―』

岡林清水著 亜細亜書房

1995年5月 四六判 174頁

岡林清水（1921～1998）は国文学者、教育者。広島文理科大学文学科卒業。高知師範学校教授、高知大学教授。高知大学名誉教授。

日本近代文学が専門で、高知の近・現代文学研究における第一人者。本県文学の調査・研究に努め、『土佐近代文学者列伝』（共著）、『高知県文学史』『自由民権運動文学の研究』『土佐風土歴程』『高知県文学散歩』など、高知の文学を体系的に把握する上で不可欠というべき、数多くの著書を残しています。

1992（平成4）年に教職を退いた後も、土佐史談会々長、高知ペンクラブ会長、高知文学学校運営委員長などを務め、高知の文化発展に指導的役割を果たしました。

豊かな学殖に加え、温和明朗、話術にたけた岡林氏は講師として活躍。多くの人々から敬愛を集めました。本書『歌集 長江―三国志の旅―』も、そうした氏の活動に基づく一冊。広大な中国大陸に三国志ゆかりの地を訪ねる旅に、講師として同行。行く先々の古跡に立っては、遥か昔、群雄割拠の時代に思いを馳せつつ、時に酒宴を交えるという、いかにも土佐人らしい旅の様子を詠むと同時に、現代における日中戦争を省み、未来への思いを詠じています。

（学芸課／小松路代）

受贈報告（平成23年1月～3月）敬称略

▼**松谷みよ子**・「松谷みよ子色紙 お月さんももいろ」▼**舘上敬一**・「井伏鱒二色紙 勸酒（複製）」▼**食野雅子**・「ガフールの勇者たち11 「ガフール伝説」と真実の王 キャスリン・ラスキー原作 食野雅子訳 メディアファクトリー刊」▼**遊美堂**・「Very Best Artists Collection 遊美堂創立20周年記念画集 遊美堂編刊」▼**小松弘愛**・「日韓環境詩選集 地球は美しい 佐川亜紀・権宅明編訳 土曜美術社出版販売刊」▼**横田晴光**・「草莽ノ記～天誅組始末～ 阪本基義著 奈良県東吉野村刊」▼**石本幸美**・「歌集 流氓のごと 石本幸美著 飛鳥出版室刊」▼**依岡隆児**・「読書のススメ～四国から、グローカルに～ 依岡隆児著 徳島新聞社刊」▼**松本 皎**・「蓑笠亭・愚庵・古道人研究第5号 松本 皎著刊」▼**林 亮**・「遠国抄 林 亮著刊」▼**岡林宣子**・「歌集 長江―三国志の旅― 岡林清水著 亜細亜書房刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

紙芝居自転車春美号デビュー！

ますます充実する紙芝居公演。HARUMI CYCLE"春美号"が すてきな紙芝居の世界に皆さんを誘います！

こどものぶんがく室にこの世に一つだけの紙芝居自転車がやってきました。その名もHARUMI CYCLE(春美号)です。

春の風にのって藤並の森から抜け出したやわらかい緑の春美号。きっかけは、カルチャーサポーターであった市原春美さんの想いからです。

市原春美さんはカルチャーサポーターとして文学館事業に深く携わっていただき、責任感とボランティア精神のとてもお強い方でした。

▲「春美号」のデビューとなった4月2日(土)おはなしキャラバンの様子。88名のお客様でにぎわいました。

特に紙芝居活動においては、みなさんのために、紙芝居を持ち運びしやすいように専用袋や舞台、拍子木など、すべてご主人とご一緒に手作りでいくつも作って下さいました。出張おはなしキャラバンの時に持って行く袋や舞台はすべて市原春美さんからいただいたものです。

「私ね。リアカーに紙芝居や本をいっぱいのせて子どもたちに届けるのが夢だったのよ。でも、文学館のおかげでいろんなところで演じさせてもらって本当によかったわ」

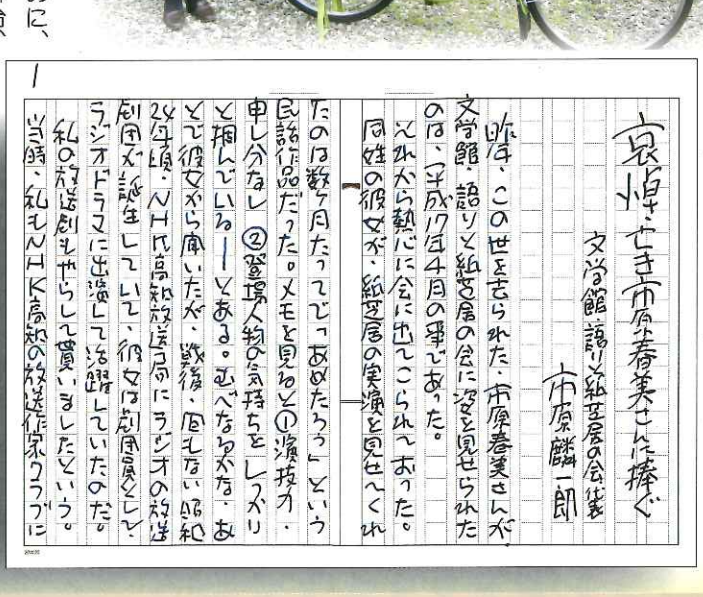
と言っていただいたことが印象に残っています。

今回の春美号は、春美さんからいただいた多額のご寄附の一部で特別に製作した自転車です。

春美さんの想いを受け継いでたくさんの子どもたちやいろんな方にどんどんこの春美号で紙芝居公演をお届けしたいと思っています。

(学芸課／門田貴美子)

◀文学館 語りと紙芝居の会・会長の市原麟一郎さんより哀悼のメッセージが届きました。



哀悼・亡き市原春美さんに捧ぐ

文学館 語りと紙芝居の会 代表
市原麟一郎

昨年、この世を去られた市原春美さんが、文学館・語りと紙芝居の会に姿を見せられたのは、平成27年4月の事であった。

それから熱心に会に出てこられておった。

同姓の彼女が、紙芝居の実演を見せてくれたのは数ヶ月たってで「あめたろう」という民話作品だった。メモを見ると①演技力・申し分なし ②登場人物の気持ちをしっかりと掴んでいる―とある。むべなるかな。あとで彼女から聞いたが、戦後、間もない昭和24年頃、NHK高知放送局にラジオの放送劇団が誕生していて、彼女は劇団員としてラジオドラマに出演して活躍していたのだ。

私の放送劇もやらして貰いましたという。

当時、私もNHK高知の放送作家クラブに所属し、せっせと土佐の民話の放送劇を執筆していた。当時、私は須崎に在住していたので、放送の収録現場には立ち会えなかった。それで彼女のことは知らなかった。

話を聞いて、民話のつながりで、五十数年ぶりの再会となった。私はなんとも不思議な縁に驚いた次第である。

それから彼女がせっせと紙芝居の公演に通っていた、神田のミニシアター「ビス」に彼女から誘いをうけ、私と同家の藤本知子さんと二人で毎月定期的に紙芝居公演に赴く事になった。そこで春美さん、藤本さん、私と三人でお茶を飲みながら楽しい談話に興じたひとときを、いま懐かしく想い出す。

春美さんの優しさにみちた、嫣やかな微笑が、今もこの脳裏に焼きついている。

天はなぜこの人を早く召されたのだろうか。

想えば惜しい人を喪ったと、つくづく想う。

合掌

高知県立文学館 おはなしキャラバン

入場無料

毎月第1土曜日、午後2時から、文学館1階の「こどものぶんがく室」にて好評開催中！

高知県立文学館では、土佐の民話紙芝居を中心とした内容で紙芝居や絵本の読み聞かせを行っています。館外へのボランティア公演も行っていますので、お気軽にご相談ください。

◆語りと紙芝居の会 定例会

(毎月**第2土曜日** 午後1時30分～開催)

土佐民話の第一人者・市原麟一郎さんを中心に、参加者同士が語りや紙芝居の演じ方などを学びます。時には、「春美号」で紙芝居演習をします。

学芸員メモ

この四月に、高知県立文学館へ配属になりました。昨年までは、国語教員として高等学校で勤務していました。学校では、話す力や聴く力、読み書きをはじめとする幅広い力をつけることが強く求められており、主に実用的な国語力を重要視してきました。そんな中で、純粋に文学を楽しんだり研究したりすることができず、もどかしさを感じることもありました。

文学館の常設展や企画展に足を運んだことも何度かありました。展示物や解説を読み、それについてあれこれ考え、少しだけ知識が増え、心が豊かになったような気がしました。特に、作家の人生について知ることが自らの人生観に影響を与えるという経験を得たことが印象的でした。

作品関係者への取材や資料集め等の作業を通して、色々な角度から作品や作家を眺め、新しい発見をし、大人も子供も楽しめる展示としてそれらを発信していきたいと思います。

「考える力」のもとになるのは「感じる力」です。特に、若い方々に、文学に親しみ人生の糧としていただきたいと思います。文学館の一員として、私自身も心に残る作品との出会いを持ち、それを皆様方に紹介していくという作業に一生懸命取り組んでいます。

高知県の皆さんや県外からのお客様に喜んでいただけるよう、居心地の良い文学館づくりに微力ながら取り組んでまいりますので、ぜひ文学館においでください。お待ちしています。

（学芸課／北添尚子）

●朗読フェスティバルを今年も開催しました！

2月19日（土）に開催した「朗読フェスティバル2011」には、12組22名の出演者のみなさんが集まり、様々な作品をそれぞれの想いをこめて朗読しました。

また、フェスティバルの最後には、「アルプスの少女ハイジ」（ハイジ役）などでおなじみの杉山佳寿子さんを特別ゲストに迎え、講演会「楽しい朗読」を開催しました。

講演会は、杉山さんのパワーと人柄、魅力があふれる楽しい内容で、絵本「あらしのよるに」の朗読も披露していただき、五感を大切にしながら朗読することの素晴らしさ・楽しさを教えてくれました。質疑応答のコーナーでは、朗読に関する質問がどんどん飛び出し、予定していた時間を越えてしまうほどの熱心なやりとりが行われました。

来場者の方からは、「こうしたイベントが長く続いたらと思う」「今後も朗読を育てていくような活動の継続を」などの声をたくさんいただくことができ、好評のうちに終了しました。

▲質問に答える杉山佳寿子さん

高知県立文学館では、朗読を通した文学発信地としての意義をふまえつつ、来年も、出演者のみなさん・ご来場のお客様が共に楽しんでいただけるイベントを目指します。

ぜひ、ご期待ください。

（学芸課／野々村昭美）

●ミュージアムショップより

文学館では文学に関する様々なグッズに加えて、以前より高知城を訪れたお客様からご要望が多かった高知城関連グッズを入荷しました。

まず目を引くのが、名城を歩くシリーズ6「高知城」（600円）土佐にそびえる名城「高知城」。城の歴史や物語、土佐国の名城・古城めぐり、お城周辺の観光地などが豊富な写真や地図で紹介されています。（「高知城鳥瞰復元図」付）

根強い人気があるのは「日本の名城」トランプ（1,780円）

普通のトランプよりやや大きめで、高知城をはじめ世界遺産 姫路城など、文字通り日本中の名城の写真があしらわれています。

また、「高野切折本」など土佐山内家宝物資料館のオリジナルグッズを当館でも、販売しております。

ぜひ、ミュージアムショップにお立ち寄りください。

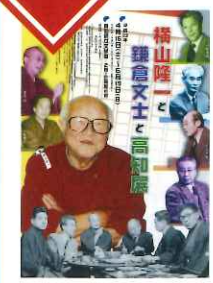
（事業課／岡崎由美子）

高知県立文学館ニュース　第53号　平成23年4月16日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX088-871-7857

高知県立文学館 カレンダー　4月～6月

企画展案内

横山隆一と鎌倉文士と高知展



平成23年 4月16日(土)～6月19日(日)　会期中無休

会　場：高知県立文学館2F　企画展示室

観覧料：400円（常設展含）　開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

高知県出身で「フクちゃん」などの作者として有名な横山隆一さんは、昭和12年から鎌倉に住み、多くの鎌倉文士(川端康成、大佛次郎、久米正雄)らと交流を深めました。展覧会では、鎌倉文士ゆかりの品々や書簡などとともに、横山さんと文士たちの魅力ある世界や高知との関わりをご紹介します。多彩な関連イベントもあります。

横山隆一展の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

●平成23年度(上半期) 文学カレッジ●

高知県立文学館では、高知ゆかりの作家や作品について、じっくり学べる文学カレッジを開催しています。今年は、常設展示でご紹介している作家のうち5人を取り上げました。さまざまな角度から高知の文学をお楽しみいただければと思います。

日程：平成23年　4／23(土)、5／28(土)、6／25(土)、7／23(土)、8／27(土)
時間：各回とも午後2時～3時半まで
場所：高知県立文学館1階ホール
定員：100名

※事前に専用の申込用紙か電話または文学館受付でお申込みください。また、内容など詳細はお気軽にお問い合わせください。

人事異動

【転入】

新所属	旧所属
事業課長	議会事務局
主幹	高知北高校

【転出】

中央児童相談所	事業課長
岡豊高校	主幹

杉本ゆかり	黒石由美
北添尚子	間城彩佳

文学館の年間企画案内

© Nibariki

宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展

平成23年 7/2[土]～9/4[日]　観覧料：500円(常設展含)

市原麟一郎・よみがえれ土佐民話展

平成23年 9/17[土]～11/13[日]　観覧料：400円(常設展含)

太宰治(日本近代文学館蔵)

太宰治と田中英光展

平成23年 11/26[土]～平成24年 1/15[日]　観覧料：500円(常設展含)

横田稔　絵本の世界展

「はなの のびる おうさま」

平成24年 1/21[土]～2/22[水]　観覧料：400円(常設展含)

「小さな実(くみ)」(1993年)

星野富弘　花の詩画展

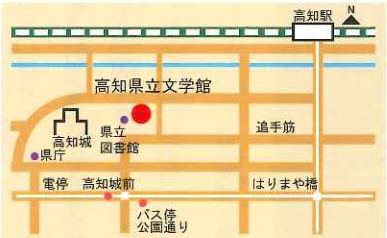
平成24年 3/1[木]～3/31[土]　観覧料：500円(常設展含)

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
観覧料	一般350円 特別企画展のあるときは、料金が変わります。 20人以上の団体は２割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者１名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港連絡バス(朝倉(高知大学前)行または県庁前行)　「公園通り」下車　北へ徒歩５分
●JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩５分
●バス停公園通り下車北へ徒歩５分

高知県立
文学館

〒780-0850
高知市丸ノ内１丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857